



くっつけてつなぐ

心あったかニュース

我が職場にもある、なにげないものにも、努力の積み重ねがあったことがわかったニュースをお届けします。昔のりは、ご飯粒をつぶしていたというのを聞いていた方も多いと思います。飯を原料とする糊は腐りやすく、買い置きが出来なかつたため、自分で作るか使う分だけ買いつぐに使い切る必要があった。明治32年木内弥吉は腐らない糊の化学的処理に成功。デンプン糊に防腐剤を混ぜることで日本初の「保存の効く糊」として発売。香料を加えて糊の刺激臭を消す工夫もなされていた。しかし時間の経過に伴い徐々に粘性が失われ、また当初価格は姫糊の30倍も高いことなどからなかなか普及しなかつた。その後の改良に伴い需要も伸び、東日本において大ヒットを収めている。現在、デンプンはタピオカを使用しており、無香料となつている。ウイキペディアより)みんなが知っている、円錐状の透明な容器にオレンジ色のキャップの事務用液状のりは、事務用液状のりにおいて不動の国内

シェアナンバー1だそうです。このヤマト株式会社についてのお話は、東洋経済オンラインよりご紹介いたします。

長谷川家が代々経営を担うヤマトの出発点である。長谷川家には「二代一起業」という家訓がある。読んで字のごとく「二代ごと」に何かしら新しい事業を起こせ」という教えだ。一子相伝で1つの事業を受け継ぐのではなく、新規事業を開拓せよ。2代目・武雄が経営を担っていた戦時中は、のりの原料である米も芋もとうもろこしも、すべて食糧として統制されてしまった。苦肉の策として、武雄は彼岸花やダリアなどの植物の球根から澱粉を抽出し、のりの原料として使用した。さらに、加熱処理をしない化学的処理を施し、より強力で劣化しない澱粉糊を作る「冷糊法」を完成。のちに製法特許を獲得する。戦争が終わり、日本が一面焼け野原から再出発したころに経営を受け継いだのは、3代目・澄雄である。澄雄が始めた新しい試みは、ヤマト糊を入れる容器をガラスや陶器からプラスチックに切り替えた。4代目・長谷川豊社長は、事務用品としてではなく、個人の趣味の世界で使ってもらえるようアート商材を生み出した。現在のヤマトの事業は、非常に多岐にわたり、「自動車産業」「エレクトロニクス

産業」「製紙産業」「原子力産業」と多様な分野のシール、テープを担っている。原子力発電所で使われた養生テープは、焼却の際に有害ガスを発生させない環境負荷がないという専門検査機関のお墨付きを得ている。「物と物をくっつける」というたった1つの機能を横へ横へと派生、拡大させるかたちでヤマトは事業の幅を広げてきた。それが長谷川家の「二代一起業」のかたちである。

編集後記

日常に目をこらせば、数代にわたって、取り組んで今に至っている、歴史がありました。受け継がれているものを、大切に使用したと思います。くっつけることって、便利で、効率的になり、倍々が増えていくような感じがしますね。溶接だったり、日本は、こういうことが得意かもしれません。人もくっつけていきたいと思えます。